

筑前木屋瀬 祇園祭 中止のお知らせ!!
 数次にわたって協議が進められてきた「令和4年度 筑前木屋瀬祇園祭」の開催につきましては5月末に開催の中止が決定いたしました。3年連続の中止の対応は心よりさびしく思いますが、また来たる来年度の祇園祭に向けて準備を進めて参りますので開催の際には木屋瀬に是非いらしてください。



北九州市立長崎街道木屋瀬宿記念館運営協議会 広報部
 北九州市八幡西区木屋瀬三丁目16番26号(〒807-1261)
 TEL 093-619-1149
 FAX 093-617-4949

久しぶりのイベントで会場は盛り上がりました!!



ゴールデンウィークの5月3日から3日間にわたり、第20回木屋瀬芸術祭を開催いたしました。一日目は、恒例の木屋瀬中学校吹奏楽部のコンサート、およびフルート・ファゴット・マリンバ・ピアノによる「近くにコンサート」を実施し、多くの来場者に音楽を楽しんでいただきました。二日目は、日本経済大学の竹川克幸教授による歴史講演会「長崎街道と文化観光・九州遊学」およびシンポジウム「淡彩画家・版画家・漫画家とみる街道の魅力」を実施しましたが、新しい視点で長崎街道を学ぶことができ好評を博しました。また、朗読劇「泰子、河内に吹く風のように」は、朗読と音楽がコラボした素晴らしい舞台を繰り広げました。三日目は、「木屋瀬宿場をどり」をはじめ計6団体が、3年ぶりに筑前各地の伝承盆踊りを披露しました。



期間中は、ボランティアの皆さんによるバザーやまちなみ案内、また地域の各施設の皆さんにも様々なイベントを開催していただき、芸術祭を盛り上げていただきました。多くの方々のご協力により、新型コロナウイルス感染症対策に万全を期しながら芸術祭が無事開催できましたことを、心より感謝申し上げます。

長崎街道木屋瀬宿記念館運営協議会 こやのせ座運営部会長 山田 靖

瓜田惇二展 —仲間たちと描く木屋瀬の風景—

あなたの知らない世界 是非一度ご覧下さい。

現在、みちの郷土史料館では第84回企画展「瓜田惇二展—仲間たちと描く木屋瀬の風景—」【令和4年4月29日～6月26日】を企画展示室にて開催しています。

本展は、木屋瀬出身の淡彩画家である瓜田惇二氏の描く「昭和の木屋瀬」を題材とした淡彩画と、西川幸夫氏が主宰する、スケッチ・淡彩画教室「四季彩」生徒の淡彩画作品の約60点を展示しています。この「淡彩画」とは、しっかりと下描きのスケッチ線を活かしながら彩色の透明感を出し、淡く仕上げる技法であり、特徴としては下描きのタッチを残すことで生まれる繊細な表現が得意であることがあげられます。

江戸時代、かつて宿場町であった面影を残す木屋瀬の町並みと、やわらかく淡いタッチの淡彩画が調和した絵画作品を存分に楽しめる企画展となっていますので、淡彩画や木屋瀬にご興味のある方は、是非足を運んでみてはいかがでしょうか。

開催中

瓜田惇二展 (Urita Junji) —仲間たちと描く木屋瀬の風景—
 2022.4.29(金祝) ▶ 6.26(日)

北九州市立長崎街道木屋瀬宿記念館
 〒807-1261 北九州市八幡西区木屋瀬三丁目16番26号 TEL 093-619-1149 FAX 093-617-4949

筑前木屋瀬 第12回 今昔歳事記 紅屋泰助氏(故 柴田泰助氏)の「筑前木屋瀬今昔歳事記」の第14回目です。今回は、「ひろば北九州」平成22年11月号の行事・風物について、前編としてご紹介させていただきます。

まちづくりイベント[宿場まつり] 曲折を経て、住民挙げての催しに成長

霜見月・十一月は「みんなで踊ろう宿場をどり」をキャッチフレーズとする恒例のまつりイベント[筑前木屋瀬宿場まつり]を紹介させていただきます。今年(平成二十二年)は十一月七日(日曜日)に開催の予定でございます。

此の行事は、当地・木屋瀬の歴史的文化財産を活かした「文化の薫るまちづくり」の推進を趣旨とする八幡西区役所まちづくり推進課の「長崎街道黒崎・木屋瀬キャンペーン事業」の一環として始められ、今年で第十八回を迎えます。

此の行事の発端は、北九州市の「ルネッサンス構想・長崎街道整備計画・木屋瀬地区整備事業」です。その進捗に合わせて、先行する「筑前黒崎宿場まつり」に遅れること四年。当時、木屋瀬地区整備事業に関して行政との唯一の窓口とされていた「筑前木屋瀬街づくりの会」が主催団体となり、行政支援の下で華々しく始められたのでございます。

然しながら「筑前木屋瀬街づくりの会」の理念や役員構成などの実態から、地域住民の協力を得る事が適わず、回を重ねるにつれ、住民不在のイベントへと転じていきました。

そして、愈々運営の行き詰まった第八回は自治区会と共催。次いで第九回にして漸く地元八団体(自治区会・商工連盟・老人会・宿場踊り保存会・青年会・商栄会・資料保存会・筑前木屋瀬街づくりの会)で結成する筑前木屋瀬宿場まつり実行委員会の主催となり、地域全体で取り組む組織構成へと推移発展を遂げ、今日に至っています。

又、キャッチフレーズ「みんなで踊ろう宿場をどり」こそ当初から変わりませんが、自治区会との共催となった第八回から[筑前黒崎宿場まつり]の縮小版的趣であったそれまでの企画内容を一新しました。

以来、木屋瀬の福岡県民俗無形文化財[宿場踊り]を中心に、筑前各地の伝承盆踊り団体が旧長崎街道筋を舞台に競演する時代絵巻[筑前伝承盆踊りの祭典]を主幹企画として発展を目指しています。さらに此の方向性に「町並み資料館」「スタンプラリー」「うまいもの市」などの催しが織り込まれ、他に類無き特色を持つ文化イベントとなって居ります。

以上、淘汰と紆余曲折を経ながらも、今では悠久なる木屋瀬大川(遠賀川)の如く流れも定まり、地域を挙げての住民参画イベントへと育って参りました。

因みに、私は第八回より第十一回まで企画委員長を与り、第十二回以降は副実行委員長役を仰せつかって居ります。これから自主企画・自主運営の信条と“熱き思い”で取り組み、木屋瀬住民の郷土の誇りとなる行事へと成長することを想いねがう次第でございます。

それでは[筑前木屋瀬宿場まつり]の主幹企画である「筑前伝承盆踊りの祭典」に参画予定の伝承盆踊りをご紹介申し上げます。

つづく (記念館)

木屋瀬宿記念館運営協議会 第22回総会を開催

- 4月22日、こやのせ座にて第22回総会を開催しました。
 - 一、令和3年度の事業報告と決算
 - 二、令和4年度の事業計画と予算案
 - 三、役員交代
- 三、役員交代について報告・説明を行い、令和4年2月10日に本運営協議会が「北九州市表彰」(まちづくり功労)を受賞した報告もいたしました。役員につきましても、徳永興紀理事と高宮歳継理事が退任され、後任として高野義仁氏と八尋弘文氏に就任いただきました。
- 今年度も、これまで以上に木屋瀬の魅力を広く発信することで、地域文化の進捗と賑わいづくりに努めてまいります。皆様のご支援ご協力をお願い申し上げます。

長崎街道木屋瀬宿記念館運営協議会
 理事長 山田 靖

シリーズ

文化の薫る町 木屋瀬

第五回

木屋瀬宿の名家 梅本家

過日、野面の八所神社に参拝しました。境内を散策すると石灯籠の寄贈に木屋瀬宿年寄船庄屋梅本彌七郎の名前がありました。船庄屋の職名は他の宿場には見られない珍しい職名で木屋瀬独特の職名で遠賀川との関係の深さが感じられます。参道の石段の両側には、伊馬春部の先祖高崎新四郎の名入り灯籠もあり、八所神社は古くから木屋瀬宿と深いつながりがあり、宿中の人々から深い敬愛と信仰があったことが良く分かります。



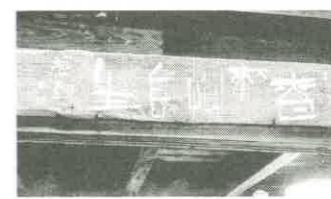
梅本家 正面

早速梅本家へ伺い、現当主の梅本静一氏に刻印のあった彌七郎についてお尋ねしたところ、彌七郎は、幕末の天保年代酒造業を営み、役職として船庄屋を兼務し遠賀川の船の運送管理の任に当たっていたことが判明しました。又、酒造業時代の遺物として備前焼きの大甕が現在も通り土間に飾って有り歴史が感じられました。梅本家のルーツについて静一氏にお尋ねしたところ、山口県の守護大名大内氏の家臣、杉氏に発するとした家柄で家系図もあり、幾多の変遷をへて香月の梅屋敷を拠点としていましたが、八代目から木屋瀬に移り、名前を「梅本」とし、商号を「香月屋」としていました。その後を商号「油屋」(やまし)と名乗り酒造業を営みました。明治に入り醤油醸造業を始め、昭和20年代に廃業しています。



備前焼きの大甕

梅本家は、木屋瀬に大変貢献された家柄で、享保の大飢饉では、木屋瀬から餓死者を一人も出さないとし、十一代梅本弥次兵衛さんが救済に奮闘されています。後の人達はその功績を称え感謝の礼として木像を作り、西元寺に寄贈しています。その像が現在も西元寺に残っています。又、文化的な面としても貢献され、木屋瀬宿の紹介で説明される木屋瀬宿之図ですが、麻生東谷が描いた板絵着色木屋瀬宿図絵馬を現本として、画家堀尾水田が梅本家に長く逗留して模写して描いたもので、須賀神社に奉納され現在参籠殿に飾られています。板絵より、大きく色も鮮やかで見やすく、当時の様子をよく再現しています。又、梅本家の通り土間に掛けてある、扁額(へんがく)は俳句の創始者子規の一番弟子、河東碧梧桐の書かれたもので素晴らしい書で、新しい俳句を目指した漢詩のようです。碧梧桐は、度々梅本家を訪れ句会を催し指導をしたようです。そのような環境と縁が伊馬春部という全国的に通用する文化人を木屋瀬から輩出したと思われる。梅本家の屋敷は西の構口と本陣の中間地帯にあり、通称、改盛町と呼ばれる地域です。街道に面した主屋の北側に通り土間を設け川と街道との連絡を容易にしています。主屋は、平入切妻作りの二階建て、壁は白漆喰の大壁づくり、建築年代は天保年間と推定されています。棟札から明治5年に改築されて葺屋より瓦屋根に改造されています。木屋瀬を代表する百年を超す古民家の一つで、今も住み続けて居られます。



河東壁梧桐 自筆の漢詩

川風に混じる梅の香酒旨し
夏の空帆を張り下る川ひらた

本町 野口靖彦

長崎街道 ひなまつり 報告

皆さん笑顔で喜んでいただけました。



「長崎街道ひなまつり 木屋瀬宿～立場茶屋銀杏屋(平成4年2月12日～3月27日)」では、長崎街道沿い文化施設4館である長崎街道木屋瀬宿記念館、旧高崎家住宅、江戸あかりの民藝館、立場茶屋銀杏屋が連携し、多くのひな人形とそれにまつわる貴重な品物の展示を行いました。また今回のひなまつりイベントでは、令和2年にコロナ禍となって以降、最多の来館者数を記録するなど、非常に活気のあるイベントとなりました。来年度も引き続き、きらびやかなひな飾りと共に長崎街道の歴史と地域の文化も併せて楽しんでいただきたいと思います。

文化発信の寄せ太鼓。こやのせ座発、全国行き。

ホームページ http://koyanose.jp

自由の中

「兎さんが餅を搗いている」と子供の頃の夢であった。お月さんに人間が行って土産に月の石を持って帰って来た。絶え間なく前進を続ける科学に生まれた新しい自由である。これに伴い私達の自由も止まる事なく拓かれていく。欲しい花や野菜をいつでもどこでも求める事が出来る身近な自由がある。暮らしの場でも、学びの場でも自分の考えを素直に発表し研究を重ねて、正しくて好ましい道を選ぶ自由がある。

こうした無限にある自由が、今の私達を翼はなくても大空を翔びまわらせ、大海原を押し渡らせ、大地を穿ちて地下を突進させている。私達はこうした自由を次々に更新している科学社会に、はみ出さないように

上手に取り組まなければならぬ。

近くの町の不動尊のお祭りに、国宝の仏像を拝観しようとお詣りした。お堂には着飾った若い婦人が満ち満ちていた。お坊さん達の中央で、護摩供養の火が音を立てて燃え盛っていた。



わたしの昔話

供養卒塔婆は、奉納者の名と歳とを読み上げては次々に護摩の火に納められる。古式祭典の火花は息吹ながら舞い上がる。

村の婦人達の祭日奉仕の出店があったので供養祭り

の事など尋ねてみた。

「奉納者は若い婦人が多く殆んど水子供養とされていますのでその後でないと間近に仏像は拝ませませんよ」と教えて下さった。供養のための婦人達であろうか、こんなに沢山な集まりには驚かされた。これも生活の中の自由であろうか。

こうした自由を、道徳心や自尊心、貞操観や罪悪感等々が、遠くから近くから厳しく見詰めている。迷わそうとする物に迷わされず、迷い易い心を迷わさず、安易な自由に溺れる事なく、遊びや奔放な心に乱される事なく、正しく明るく歩こう。自由の中にも誠めはある。

本町 柴田由美子

柴田豊廣遺稿集より

木屋瀬宿記念館収蔵品紹介

駕籠【かい】

江戸時代、庶民にも広く親しまれていた駕籠は、現代でいうところのタクシーに相当します。2人の担ぎ手が乗る部分の前後に立ち、柄を肩に担いで人を運ぶ乗り物のことを指し、身分が高い人が乗るものでは担ぎ手が4人になるなど、様々な種類の駕籠が存在しました。元より駕籠は、將軍や大名など身分の高い人々が利用するものであり、庶民の使用は禁止されていましたが、江戸時代に入り庶民の生活が豊かになると一気に需要が高まり駕籠文化は大衆へも広がりを見せました。また、この「駕籠」というものは庶民専用の竹で作られた簡易的な造りのもの名前であり、上流階級の人々が使用するものは「乗り物」と呼ばれ、区別されていました。

長崎街道木屋瀬宿記念館に

展示されている駕籠は、詳しくは「山駕籠」といい、その名のとおり山道などで用いられた駕籠です。主に竹で編まれた簡単な屋根と円形の乗用部分特徴です。小学生のお子さんであれば実際に乗ることもできるので、江戸時代にタイムスリップした気分が駕籠へ座り、記念撮影などされてみてはいかがでしょう。



※山駕籠/みちの郷土史料館 収蔵

こやのせ 宿場町木屋瀬。伝統を受け継ぎ、次世代を育む長崎街道木屋瀬宿記念館。